

■ ドル/円の111円台後半は非常に重要！

前回（8/23）更新分で、筆者は「(本格的な米中間選挙モードに突入して行くにつれ) 米トランプ政権の政策の力点やアピール・ポイントは通商政策から減税やインフラ投資などよりわかりやすい政策にシフトして行く」と述べた。

そして案の定、先に米政権は北米自由貿易協定（NAFTA）の見直しでメキシコと大筋合意することとなり、目下はカナダとの合意についても期待が高まっている。気になる米中間の通商協議については11月の両国首脳会談まで持ち越される見通しとなっており、当面は材料として扱にくい。まして、すでに中国は相当に切羽詰まった（＝打つ手なしの）状態にあると見られ、今後は一定の“講和”条件を受け入れて行く可能性も大いにあると考えられる。つまり、米政権が諸外国との通商交渉に強権を振るう（地方の予備選を意識して振る舞う）ことに伴って市場に広がった警戒感はこちらで暫く後退することとなる。

また、最近のトランプ氏は米中間層の取り込みにあからさまに取り組んでいる様子であり、消費や景気の拡大を裏付けるようなデータのアピールに余念がない。実際、8/28に発表された米コンファレンスボード消費者信頼感指数（8月）の結果は17年10か月ぶりの高水準となり、翌29日に発表された4-6月期の米GDP成長率も事前の予想を上回る結果となった。

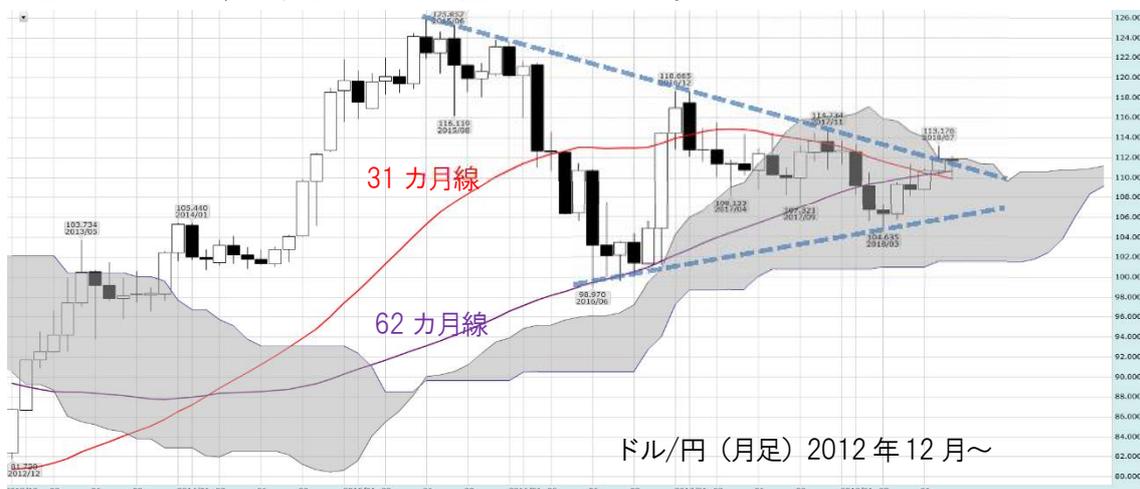
もちろん、ここにきて連日のようにS&P500やナスダック総合指数などが史上最高値を更新するなど、米株価が極めて好調に推移していることも市場全体のムードをリスクオンに傾かせている。結果、ドル/円も強含みでの推移を続けており、目下は8/21安値＝109.77円よりも2円ほど円安方向に触れた水準（8/29は一時111.83円）にある。

この111円台後半という水準がドル/円にとっては非常に大事な節目であり、そこにはまず一目均衡表の日足「雲」上限（現在は111.58円）、そして月足「雲」上限（現在は111.88円）などの節目がある。当然、これらの節目をクリアに上抜ければ、そこからの上方視界は一気に拡がることとなる。それは同時に、かねてから意識されているトライアングルの上辺（2015年6月高値と2017年11月高値を結ぶライン）をクリアに上抜けることをも意味していることは見逃せない。

なお、今週31日は週末であり月末でもある。いつも述べていることだが、この8月のドル/円の月足・終値が一目均衡表の月足「雲」上限を上抜けるかどうかという点には要注目である。

あらためて下図でも確認しておかれないが、先月（7月）は月中高値こそ月足「雲」上限を上抜けたものの、終値では同水準に頭を押さえられる格好となった。それだけ「意味のある水準」ということであり、だからこそひとたび上抜ければそのインパクトは大きい。

とにもかくにも、まずはその一点に注目しておきたい。



(08月30日 11:10)